NTS物語

❸ ビジネスモデルの確立へ向けて（第26回）

3－1編集企画体制への道（2）

出版事業②「ハンドブック」を作る③ドクター清水と「吸着技術ハンドブック」（上）

代表取締役　吉田　隆

平成元年、手狭になった本郷三丁目の盛和ビルから本郷五丁目の鈴博ビル6Fに転居したが、その1年後の平成2年6月、日本表面科学会誌「表面科学」の編集体制の強化のために○○○○○（現、編集企画部長）が入社したことは前に述べた。○○は月刊誌の他、セミナーも行ったが、やがて大型本の企画編集にも携わることになった。

当時、ハンドブック等の大型本の自主発刊体制の確立が当社の悲願だったことも前に述べた。取上げたテーマは、オルガノ㈱顧問（当時）清水博氏のご提案による「吸着技術」だった。

今回は、他社の資金援助を受けず自力で完成にこぎつけ、自主発刊路線の先陣を切ったハンドブック第一号発刊までの物語である。

●ドクター清水

ご本人によれば、清水氏はオルガノの創業メンバー6名の中の1人だった。工学博士でもあったため、清水先生、時には親しみを込めてドクターと呼んだ。

昭和40年代の「水の再生処理」から50年代の「最新の膜処理技術」、60年代の「膜処理大事典」など、清水先生はフジテクにおいて、20年間一貫して「水」と「膜」に関する知識の体系化に情熱を傾け続けた。普及版を含め販売数1万冊に及ぶ脅威のベストセラー「センサ実用事典」などの監修を務めた大森豊明博士共々、フジテクの黄金時代を築いた小野社長にとって大恩人の一人である。

私は、小野社長のメッセンジャー役としてしばしばオルガノ本社の役員室（当時、常務取締役）を訪問する中で清水先生と親しくなったが、初めてお会いした時は何と怖そうな方だと思った。身体ががっしりして古武士然とした風貌の持ち主だった。おまけに声が大きかった。だが声や容貌に似合わず、心優しく、時には男の可愛さも兼ね備えた方だと分かった時はほっとした記憶がある。

特に親密となるきっかけは、昭和59年、私の独立直後に箱根の温泉旅館に一泊して行った「最新の膜処理技術」の索引作りだった。監修者の清水先生と大阪市立工業研究所○○○○博士、フジテクの小野社長と○○○○○、NTSの創業メンバーである私と○○○○○、○○○○の3名に制作プロダクションの○○○○氏が加わった。

メンバー全員が徹夜で手作りのカードと首っ引きで行なった索引作りを通じ、私は清水先生との連帯感を強めることができた。パソコンがなかった頃、古き良き時代の本作りの効用である。それからほどなく、創業期を過ごした文京センタービルの9階事務所に、清水先生が「やぁやぁ！元気にやっちょるかっ！」と大きな声で日本酒の一升瓶を片手に顔を見せた。

それから一年後、NTSとして再出発した時も、清水先生は新事務所となる盛和ビルに手土産片手にかけつけてこられた。そして大きな声で、「吉田さん！俺はあんたに本をプレゼントしたいと思うちょる！」と力強いお言葉をいただいた。諸々の事情で、そのプレゼントの実現まで5年ほど待つことになった。

●「吸着技術ハンドブック」

平成2年から3年にかけ、5年前の約束を果たすべく、清水先生が鈴博ビル6階の事務所に訪ねて見えた。その時、暖めている企画が「超純水」又は「吸着」であり、小野社長の了解も取っていると聞いた。早速、○○に紹介した。○○は清水先生と相対し、身体も足も声も態度も全てが大きい、大物の雰囲気を備えた人だとの印象を持ったようだ。だが、○○が親しみを込めてドクターと呼び、清水先生が「クリーン・ウォーターのドクターだ！わっはっはっ！」と応えるなど意気投合する中で、まずは「吸着」から手がけることになった。その3年後、清水先生と○○という二つの個性のぶつかり合いを通して「吸着技術ハンドブック」は完成した。

○○は清水先生との3年間の格闘の中で、監修者の仕事や監修者と編集者との関係など、大型本の企画編集の基本的な考え方を身に付けたという。いわば、ハンドブック路線の第一歩を踏み出したわけだが、次号で発刊までの後を辿りたい。

●押しかけ女房

フジテク時代の清水先生は、オルガノ本社と近いこともあったが、夕刻6時を過ぎる頃、用事がなくともしばしば顔を出した。そして小野社長を酒席に引張りだしては、企画のみならず会社のあれこれのおせっかいを焼くのだった。小野社長のよろず相談相手だったが、強烈な押し付けがましさで小野社長がへき易する局面もあった。だが、フジテクの黄金時代を間近に見てきた私は、出版社にとって清水先生や大森先生など、親身になって社長や編集者の人生にまで介入しようという、いわば押しかけ女房の如き著者との出会いが如何に大切かと痛感する。

NTSでは清山先生が女房というより父親的な存在であった。

今後、若い編集者が第二、第三の清山先生や清水先生との出会いを実現することを期待したい。

（訂正：本誌2003年11月号で、○○顧問がプロデュース役を務められた書籍の内、講演録「バイオミメティックス」を削除して、資料集「水素エネルギー資料集成」を加えます。）

◉編集後記

『鬼は、外』の季節がやってきた。年男または一家の主が『福はうち、鬼は外』といいながら豆をまき、年の数だけ食べると一年中病気にならないという。私の場合、いつも鬼の代わりに豆をぶつけられ、年男にもなれなければ、主でもなく、いわばいじめられ役を毎年やらされていた。子供たちの盛り上がり方のすごいこと。でも、日ごろ私はこんなに鬼と思われていたのだろうかとは考えたことはなかった。ただのイベントであると自分に言いきかせていた。そして、翌日は立春。でも、東京はまだまだ寒い。帰宅し、電気、ヒーター、テレビ、そして手を洗い、冷蔵庫を開け夕飯の支度に取り掛かる。今回のインタビューは、こういった製品のスペシャリスト。あったか日本のおとうさんのような方。この方たちに手をかけられて、巣立った製品に囲まれて私たちは暮らしている。たまには、冷蔵庫の大掃除をしなくっちゃ。（あしだ）

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755　東京都文京区湯島2-16-16　㈱エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX：03-3814-9152　E-mail：k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース
2004年2月号（通巻60号）
2004年1月25日発行